

カササギの生息実態調査について

— 営巣の分布と形態 —

佐賀県林業試験場 松本光男

はじめに

カササギは、佐賀平野を中心として周辺わずかの地域にしか生息しない、カラス科の鳥であって、その生息地域が大正12年3月に国の天然記念物に指定されている。さらに昭和40年5月には県鳥としての指定をみるに至っている。

本県におけるカササギに関する調査研究は古から続けられているが、いずれもある小地域に限って、その生態構造をとらえたものが多く、全県的に生息の実態を調べたものはほとんどみあたらない。

このたびは、カササギの営巣形態に重点を置いて全県的に実態調査したので、その結果の一部を報告する。

1. 調査方法

調査は昭和50年3月下旬から5月上旬にかけての繁殖最盛期に限って実施し、野外調査にあたっては、県鳥獣保護員の協力を得て県下全域にわたり、カササギの営巣場所、種類、巣高、古巣と新巣の高低差等について記録するとともに、営巣場所については地形図（5万分の1）に位置をチェックした。

2. 結果と考察

表一 1 カササギ営巣の県内分布

地域区分	市郡名	営巣量(個)			構成比%	営巣密度
		樹木	電柱	その他		
東部	鳥栖市, 三養基郡	37	3	0	40	1.80.35
	神埼郡	302	12	1	315	14.42.89
	佐賀市, 佐賀郡	636	137	5	778	35.53.22
	多久市, 小城市	255	28	8	291	13.22.34
北西部	唐津市, 東松浦郡	46	1	0	47	2.10.18
	伊万里市, 西松浦郡	89	4	0	93	4.20.65
	武雄市, 杵島郡	385	76	0	461	21.12.36
南部	鹿島市, 藤津郡	167	1	1	169	7.71.11
	計	1,917	262	15	2,194	100

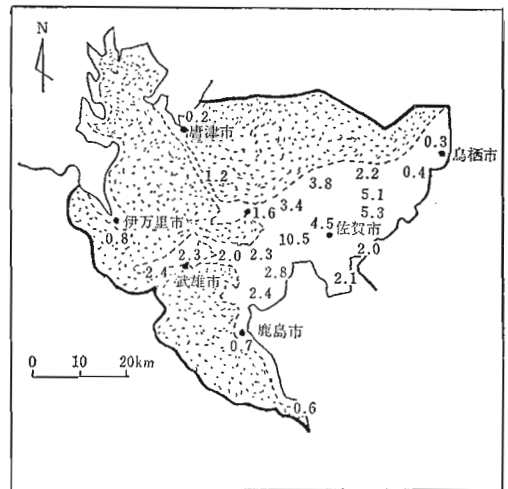
1) 営巣の分布と生息数

ワササギ営巣の県内分布ならびに生息密度をみると、(表一1, 図一1) 北部山間地域の一部並びに上場地域のうち玄界灘に面した2~3の町村を除く、県下の全市町村に広く分布しており、その大部分が佐賀平野を東西に貫通する国鉄長崎本線に沿った平坦部一帯に集中していることがうかがえる。

また山麓地帯での営巣の限度は、海拔高で50~100m位までとみられる。

さらに詳細に地域的特長をみると、県東部地域の平野部一帯に全営巣量の65%が集中しており、なかでも佐賀市、佐賀郡35.5%がトップを占め、つづいて県北西部のうちで佐賀平野よりの武雄市、杵島郡21.1%、以下、神埼郡14.4%、多久市、小城市13.2%とほぼ同率をしめしている。

なお唐津市、伊万里市と東西松浦郡は合せて6.3%にすぎない。



図一1 カササギの県内営巣密度

また営巣密度についても営巣分布とはほぼ同様の地域的特性がみられるが、とくに佐賀市を中心とした周辺地域の高密度分布がめだっている。

つぎに、生息数を営巣量からみると、県内の総量は2,194個であるが、調査もれを25%としての推定営巣

量は約2,700個と考えられる。

したがって巣1個に番いがいることを前提とし、集団の増殖率が1に近く、巣数の年間変動が小さく、個体数がきわめて安定な状態にある事実などから類推して、県下に生息するカササギの総量は5,000羽台を近年は維持しているものと思慮される。

2) 営巣の種類 (表一2, 表一3)

営巣している対象物としては、樹木が87.4%と大部分を占め、電柱その他は12.6%にすぎない。野鳥の一般的習性として樹木中心に営巣するのは当然と思われるが、カササギの場合は特に平野に点在する集落の内部やその周辺部の樹木の中で、梢が3~4枝以上に分れていて、比較的安定し易い部分に巣作りをしている。

表一2 種別営巣量 単位:個数

種別 区分	樹木		電柱			その他	合計	
	常緑樹	落葉樹	計	普通電柱	高圧柱			
巣量	359	1,558	1,917	248	14	262	15	2,194
構成比%	/	/	87.4	/	/	11.9	0.7	100

つぎに営巣の対象になる樹種は、その地域に生育しているほとんどの高木類と思はれるが、落葉樹81.3%が大半をしめており、今回の調査で確認されたものの総数は43種である、その内訳は、落葉広葉樹27種、常緑広葉樹9種、その他7種であった。

表一3 樹種別営巣量 単位:個数

種別 区分	広葉樹			針葉樹			合計
	常緑樹	落葉樹	計	常緑樹	落葉樹	計	
巣量	279	1,395	1,674	80	16.3	243	1,917
構成比%	14.5	72.8	87.3	4.2	8.5	12.7	100

各々の樹木のうちで、営巣度合の高い樹種をあげると、落葉広葉樹では、エノキ、カキノキ、ムクノキ、ハゼノキ、ナンキンハゼ、センダン、などがめだっている。また常緑広葉樹では、クスノキ、カシ、クロガネモチ、シイ、ビワ、などがある。

ところで、佐賀平野を中心とする営巣の分布は、同平野における樹木郡の分布と関連が大きいものと考えられるが、有明海沿岸部地帯では干拓の歴史が浅いため高木の樹木群がほとんどみられない現状にあるため、電柱への営巣増加がめだっており、このことが停

電事故の頻発になるおそれがあり、憂慮されるところである。

3) 新巣と古巣の関係

この調査の中で、とくに同一樹木に新巣と古巣を多段的に設けている事例をマークして両者の関係を検討すると、(表一4)古巣に比べて新巣の低いものが33.2%、古巣よりも新巣が高いものが34.4%、さらに古巣と新巣の高さがほぼ同一のものが、31.7%となっており、両者間での相関性は認められず、一定の傾向も見出せなかったが、今後長期的な取組みによる調査研究を続けることによって、古から県内各地で謔として伝承されている、異常気象とカササギの営巣高との関係について何らかの手掛りが見つかる。

表一4 古巣に対する新巣の高さ 単位:個数

種別 区分	古巣より低いもの		同じ高さ	古巣より高いもの		合計
	2m以上	2m未満		2m未満	2m以上	
巣量	20	41	57	36	26	180
構成比%	11.1	22.8	31.7	20.0	14.4	100

3. あとがき

今回の調査は、期間もきわめて短かく、その生息実態の一部をのぞいたにすぎないが、カササギの営巣分布を中心とする全県的な調査網がうたれたことは、今後の調査研究を進めるにあたって有意義なことと思われる。

最近とくに都市化の急激な発展に伴う生息環境の悪化が懸念され、早急な保護対策をたてるうえからも、長期にわたる研究プロジェクトの必要がある。

またこれらの調査を広域的に進めることによって、カササギの集団的な生態構造が逐次解明されるものと考えられる。

参考文献

- 1) 谷口一夫:カササギの分布と生態 郷土研究第3号 (1951)
- 2) 久保浩洋:カササギの分布と生息地 新郷土第195号 (1966)
- 3) 久保浩洋, 木下博行:クリークのある水田に住む隣人カササギ・アニメ23 (1975)